



思いつくまま, アメリカ

田 中 和 夫*

1. はじめに

1977年より今年(1985年)の1月迄アメリカ合衆国, N. Y. 州のロチェスター市で過ごす機会を得ました, というよりも住んでいたというのが実感ですが, 時の経つのは早いものと言っても, 8年弱の時間が実際に流れ, 私の人生で単純に計算しても $\sim 1/10$ 程度, 元気で働ける期間のかなりの部分をアメリカで過した事になります. N. Y. 州のロチェスター市といっても日本の方々には馴染みは薄いのではないのでしょうか. N. Y. 市や Los Angeles 市といった大都会は度々 T. V. 等にも出てきて, また観光等で訪れる機会も多々有るのですが, そうした大都市から少し離れた中小都市は米国には数多くあり, その地方々々の特色を強く持っています. ロチェスター市もそんな中都市の一つで人口の規模は, 郊外を含めて豊中程度です. 米国では一般的に市中心部に住む習慣が薄く, 郊外に住んで 20~30分かけて車で Office のある所へ通って来るというのが中流クラスのパターンです. 緑の芝生の広がる庭のある家でゆったりと家族と生活を楽しむのが一つの若い人達の夢でもあるからです. ロチェスター市には Xerox 社と Kodak 社の本社があり, 比較的豊かな街であると言えます. ロチェスター市独自でオーケストラを持っており, また Kodak の寄付によるロチェスター大学の大理石作りのシンフォニーホールでは秋ともなると素晴らしい演奏会が週毎に催され, 市民に憩いの場を与えます. 大半の時間を過したロチェスター大学は市の中心部より南に向かって 2 km, ジェネシー川沿いにある美しい, こじんまりとした私立大学で IVY

league には属していませんが研究に重きを置いた(従って大学院に重きを置いた)大学として, またレーザー核融合研究所, 光学研究所といった時代の最先端を行く施設で大学院生に教育, 研究の場を与えている事で全米でも有数の大学です. 雰囲気は全体的には東部の大学の伝統で保守的な色合いが強くなる年配の教授達は, いわゆるトラッド派風の服装で歩いているのを見かけます. 新しい分野, 例えばコンピュータ学科では, 学生くらいの若さの人でも助教授・教授がおり, ジーンズにTシャツといった出立ちでは外から見ただけでは学生かどうかよくわかりません.

大学の施設は非常に完備されており, また合理的に運用されています. 例えば体育施設は温水プール×2, バスケットコート×4, 室内テニスコート×4, 室外テニスコート×20, ラケットボールコート(室内テニス的一种)×6, 等で夜中の12時迄 open しており, 勉強に疲れた学生, 研究者が夜遅く迄大きな運動バックを肩に出入りしているのを見かけます. 誰がそんな夜遅くまで管理しているのかというと, 実は学部の学生なのです. 大学が日雇い契約でこうした施設の受付け役として雇い, 学生はカウンターの所で受付け管理をします. 人が来ない時はお喋りをしたり勉強をしたりして高い学費(年間250万以上)を少しでも稼ぎ出し, 親から借りる額(米では親が子供の為に無償で金を出すというのは稀で, 貸す訳です。)を少しでも少なくしようとする訳です. 図書館も同様に学生の手で管理され, 12時まで(夜中の)開いており, 寮等で勉強のスペースが十分にとれない学生達がひっきりなしに利用しています. このシステムは大学と学生の要求が非常に上手く噛み合っており, 日本でも急には無理でしょうが, 大学の施設をもっと効率的に運用する一つの方

*田中和夫 (Kazuo A. TANAKA), 大阪大学工学部, 電磁エネルギー工学専攻, レーザー核融合研究センター, 助手, Ph.D, プラズマ物理

法として考えても良いのではないのでしょうか。

2. 渡米後の Time History

'77年に渡米後、新学期の始まる9月に先立って3カ月間バッファロー市で外国人用英語学校に入り9月に備えました。と言うところなのですが、実際はこの学校には日本人がワンサカ居て(学校の生徒の $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{3}$ が日本の若者、日本のアメリカ熱が窺えます。)余り英語の方は上達しなかったのです。日本人は9月の新学期が近づくと英語のレッスンをサボっていた鬱寄せが来るのは明らかなので一種のパニック状態になったものでした。ロチェスターに移り新学期が始まるとすぐに、しっかり勉強をしていないと置いてけぼりを食ってしまう事が解って来ました。大学院のクラスは12人(米国人9人、私を含む外国人3人)でスタートし、一年後のPh.Dの資格試験を通ったのは僅か3人でそれも全員外国人でした。他の落ちてしまったアメリカ人はケロリとしたもので夫々「あ、この大学は僕には合わないよ。」とコーネル大学やプリンストン大学に荷物をまとめて移って行きました。実際この資格試験は厳格なもので落ちればそれ以上大学に居れない事になるのですが学生達は深刻に悩む風もなく、いわゆるアメリカ流というのかケロっとしているのです。ネアカですね。また、これはアメリカと日本の国民性の違いが出ていると思うのですが、日本の大学院でクラス全員が外国人、しかもその外国人がその大学から奨学金をもらってやっているというのを想像してみてください。たぶん新聞ダネになるのは間違いないですね。勿論ロチェスターでは問題として取沙汰される事もなく、幸にもPh.Dの研究を開始する事ができたのです。研究はレーザーエネルギー研のレーザーシステムを使った実験を主な中身としたものでした。こちらの大学院には何年でPh.Dを取るという事が決っていません。学科によっては6年以内取得しなければ奨学金を切られたりというのがありますが、レーザー研は奨学金にそうしたリミットは無く、10年かかってやっとPh.D終了という猛者も居りました。言い換えれば、日本で先生がテーマを与えて下さり、細かく実

験方法を指示して下さるといった親切なシステムではなく、全て御膳立てから自分でやり通さなければいけないわけです。このようなプロセスを経て来た学生は自分で考えプランの詳細を練ることの訓練が自然に出来ており、しっかりと自分の意見を持つようになります。少しそのプランについて聞いたりすると、延々と喋り出して止めるのに苦労する位です。何とか4年余りでPh.Dを済ませ、そのポストドク(1年契約の助手)に残ってくれないかとの話があり、それを受けて引き続きロチェスターに居る事にしました。ポストドク、その後研究員と経験して一環してレーザー研の皆から分けへだてなく暖かく受け入れられ、新しい物理のテーマを見つけ、非常にチームワークの良い実験グループを形成していくというのは実に楽しい事でした。ロチェスターには、研究関係でお見えになる日本人の方は割と多く、滞米中には実に色々な方にお会いする事ができました。日本に居ればとてもお会いする機会もない程の方々とも会えば気楽にお話していただき、そういう点は随分恵まれていた訳です。もちろん古巣の大阪大学からも先生、友達多勢たずねて下さり、ワインを呑み乍ら、つい夜の更けるのを忘れて話した事も二度や三度ではありませんでした。

3. アメリカについて(私見)

a. アメリカの社会。アメリカは未だ白人中心の社会です。と言うと向こうへ行かれた経験のある方は「ちょっと待ってくれよ、それは少し乱暴な言い方じゃないか。」とおっしゃるかもしれません。図1を見ていただきます。私なりの米国社会構造を直感的に描いてみたものです。頭脳の部分の大半はWASPと言われる西欧をその祖先とする白人達が中心です。これは保守的な大会社になればその傾向はうんと強く、大学等の少しでもリベラルな色合いのある所ではこれにJewishと呼ばれるユダヤ系の人やドンドン喰い込んで来ています。勿論このレベルには日系の人も居ますが、アジア系等他の人種グループは統計的に言ってもnegligible smallの数ではないでしょうか。手の部分には白人でも東欧(ポーランド等)、南欧(イタリア等)、

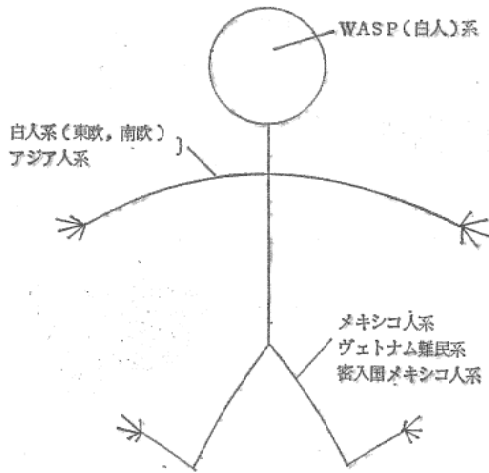


図1 アメリカ社会構造

中国、韓国、日本といったところで構成されています。例えば N. Y. 市内の果物屋さん最近殆んど韓国人が owner です。ちょっと前迄はイタリア、ギリシャ系の人がやっているのを見かけましたが、韓国系の人にはたぶん凄く働き結束が強く、ここ 2~3 年で随分入替わってしまいました。あと以外に知られていない“足”の部分にはメキシコ系、ヴェトナム難民系といった非常に安い（しばしば、法律で決められたよりずっと低い）賃金で働いている人達です。違法にメキシコ等から密入国して来ている人の数も何十万人居るとみられ、そうした人達は更に安い賃金で働いて多くの場合、国に居る家族に送金しています。ヴェトナム系の人々は、一般的にアジア系がそうであるように教育には熱心で、第 2 世代はポツポツアメリカの一流大学に入学して来ているのを見る事が出来ます。このように人種のルツボの米国ですが、頭脳にあたる部分は白人が握っているため、社会のルールは当然それ中心のもので、例えばカレンダーの行事は殆んど西欧（キリスト教）にその起源をもつものです。

そうした社会の中で、歴史、文化が全く異なる日本人がやっていくことは、それなりの気力と体力が要る事になります。ただ、この国において素晴らしいことは、“fair”である事です。勿論、探せば fair でない例も幾らも出て来るでしょうが、暗黙のうちにこれが社会の裏を背骨として通っている気がします。論理的に筋の通

る事はどんどん押して来ます。逆に論理の通らない事は、殆んど耳を傾けてもらえない訳です（現在進行中の日米貿易交渉でもアメリカ側の交渉の仕方に端的に表われています）。日本には以心伝心と言う事がありますが、これは単一民族国家、文化のバックグラウンドが全て一緒という、考えてみると随分特殊なケースに当たる訳です。従って、米国では何事も喋らないと解らない訳で、大学院生も自分の意見なり考えている事を論理的に伝えない限り、放って置かれてしまいます。特に、大学・研究所というのは論理的であれば生き残って行けるようなところもあって白人（WASP）が主な社会に、ユダヤ系、数は少ないですがインド系（彼等は実に驚くほど理屈好きな民族です）が苦もなく浸透してきているというところでしょうか。

b. 生活 研究者も生活を楽しむという点ではひけをとらず色々な事をやっています。夏はヨット、モーターボートを持っている人は週末になると、せっせと車でそれらを引張って近くの湖へ出かけて行きます。他にバックパックでの山歩き、キャンプ、キャンピングカーでの大がかりなキャンプツアー等があります。冬になれば、北国ロチェスターはやはりスキー、スケートという事になります。車で 30 分の郊外のスキー場へは皆よく行きます。また研究者でセスナを持っている人とは週末、よくカナダ国境近くの大きなスキー場へひとつ飛びしました。残念乍らこうした大がかりな余暇の過ごし方は日本に未だ定着していませんが、働きすぎと世界から言われている日本でも、そのうちある程度大がかりなレジャーが盛んになるのではないのでしょうか。日常生活でもコンサート、スポーツは日本でのそれより遥かに身近なものです。有名な音楽家のコンサートのチケットの値段も、目を剝く程の事もなく服装も着飾った人も居れば G パン・T シャツの人も居るといふ具合で、気軽に聴きに行けるのです。そう言えばよく開かれるホームパーティー（もし好きなら毎週末どこかのホームパーティーを見つける事ができる）も日本では少し気取って、お洒落をしてといった感じで婦人雑誌に紹介されていますが、実際は実にあっけらかんと皆、不断着でやって

来ます。持ち寄りパーティーの場合は、家族のある人は何か食べるものを、singleの人はワインかビールと実質的で、皆実に楽しそうにワイワイガヤガヤとお喋りを enjoy します。

c, 女性の社会進出。ウーマンリブ発生の国アメリカでは女性の社会的進出がどんどん進んでおり、女性は社会でほぼ平等に扱われています。ただ完全に平等に扱えば、男性側も相当な(?)譲歩をせざるを得ず(例えば、働くのを入替わり、主夫になるとか)、そうしたバランス関係が落ち着くまではアメリカ社会は過渡期と見るべきでしょう。子育ての例をあげても女性が家に居て子供の面倒を見るというのは、トコトン突き詰めて行けば女性がやらねばならないという理由はどうやら見当たらないようです。有名なABC放送のニュースキャスター(最近年間給料60万ドルで引き抜かれた)は妻が法律で学位をとり終わる一年間は、育児、家事に専念する浪人生活を送りました。家にとじ込めるのを嫌と妻が言い、夫が“主夫”は嫌と言えば

即刻、離婚となる国なのです。離婚率は実に50%にもものぼっており夫婦間のエネルギーは相当浪費される訳ですが、日常茶飯事化しているのが現状です。「日本はこうした社会形態は10年遅れでアメリカを追っており、こうした現象は10年後の日本にも現われてくるだろう。」とアメリカで幾人もの人に言われました。

4. おわりに

随分、^{まづばく}雑駁ではありますが、私個人のアメリカ観を思いつくまま並べさせていただきました。ふり返って見ると、あしかけ8年もの時間が流れてしまっており、何かにつけ(良きにつけ、悪きにつけ)こうした体験は私の考えに影響を及ぼして行く事でしょう。日本の日常生活の中に、氾濫している日本的に濾過されたアメリカもしくはアメリカ風なものではなく、何か生なアメリカの雰囲気을少しでもお伝えできたのなら、望外の幸せです。